して念仏の信仰が保たれているということである。それが最も大きな祐天の行蹟と言えるであろうし、それこそが祐天の目指したものであると言えるのである。

おわりに

祐天を浄土宗の立場からその伝記と足跡の解明を試みた。おそらく、初めてのことであろう。もちろん、「普及本」の立場から祐天を見た先生あるいは国文学者などの人々は大勢いた。しかし、祐天は決して霊能力者ではなく、一人の凡夫でなければ浄土宗の僧侶とは言えないのである。

以前私はある人に、祐天のその超人的な人格はそのままにしておいたほうが民衆の信仰を集めやすいと忠告されたことがある。しかし、現代の科学的合理的教育を受けた私には、まず解信(げしん)しなければ本当の信仰に入れなかったのである。したがって、祐天が本当に霊能力者であったり、また不動明王から智慧を授かったような人であっては、仏教を信じ浄土教を信じてきた私にとっては、聖書に書かれた神を信じるのと同じぐらいの不合理さを求められるのである。したがって私にとっての祐天はあくまでも人間であり、凡夫であり浄土を信じひ

たすらその浄業を修する人でなければならないのである。幸いなことに、調べれば調べるほど祐天は浄土宗の僧侶であった。これでこそ私も祐天に迫れると言う自信がつき、目標も明確になったのである。

祐天こそ綱吉の偏見から浄土宗を護り、徳川家の信仰を再び黒本尊に向けさせ増上寺に向けさせた人であった。そして、徳川家の繁栄とともに浄土宗の発展を約束した人であったと言って良い。そのためには、祐天の学問と実践と真の教化という三本柱が必要なことが改めて明らかとなったであろう。

しかし、初めに述べたように祐天の研究はまだ始まったばかりである。肝心の思想的研究があいまいであるために推論が多くなってしまったことは否めない。さらに、今に残る祐天の遺跡調査もまだまだ不完全である。願わくは、多くの祐天信仰を持った人々あるいは遺物を持った人々が祐天寺に集まり、その行蹟の顕彰をされんことを。そして、自らの信を深くし、祐天のあとに続かんことを願ってやまない。

最後になりましたが、本論文をまとめるにあたりまして祐天上人関連の史料を快く提供くださった松阪市清光寺上人、松阪市清水西方寺上人、多気郡宝泉寺上人、そして松阪の寺院を紹介くださった松阪市射和伊馥寺上人、鎌倉市高徳院上人、横浜市良忠寺上人ならびに副住職、いわき市最勝院上人、そして新妻孝雄氏、いわき市専称寺を兼務しておられいわきの方々を紹介くださった九品寺上人、いわきの図書館でいろいろアドバイスをくださり史料の

提供までしてくださった佐藤高徳氏、品川区清岸寺上人、品川の寺院を紹介いただいた港区白金法蓮寺上人、そして論文を書くにあたり多大なるアドバイスと論説を提供いただきました板橋の専称院住職である玉山成元教授、そのほか資料などのご提供をいただきました多くの方々に感謝申し上げます。

さらに、祐天寺の伊藤丈主任研究員には、基礎的な資料の提供ならびに助言をいただきました。

また、修士論文作成にあたりまして指導を賜りました阿川文正主任教授ならびに大谷旭雄教授には、稚拙な研究論文を内容あるものに高めていただきましたことに改めて感謝申し上げます。